

遥かなる時の中で

「2年生のみなさんへ」
拡大号

本日の格言

今日という一日は、明日という日の二日分の値打ちがある。

—— ベンジャミン・フランクリン

自分に合った勉強方法を探して②

前回紹介した認知特性の6パターンを手がかりとして、色々な勉強の仕方があることを明らかにしていきたいと思います。今回は3名の先生について書きました。もし、「〇〇タイプ」という言葉が何か思い出せなかったら、前回のページをもう一度読み直してくださいね。

ほとんど偏りがなく、オールラウンダーなH先生

サウンドタイプが少し低い以外はどの項目も平均して高いオールラウンダーで、しいて言うならラジオタイプが得意という結果になりました。たしかに、社会科教師として膨大な知識量を誇りながら、数字や機械の扱いにも強く、料理も得意な万能型であることが結果を裏付けています。

勉強は授業をしっかりと聞いておけば、ある程度困らずにできたそうです（うらやましいですね）。ただ、バランス型らしく色々な感覚を駆使して記憶に役立てていることも分かりました。歴史の勉強は授業を受ける前に「歴史漫画」を読むことで大まかなストーリーを頭に入れたり、地理の勉強は旅行先で実際に自分の目で見て印象づけたりしていたそうです。これも一つの例ですが、地理では「どの地域でも共通していること」と「その地域にしかないもの」を学んでいくのですが、H先生の頭の中では、旅行先で見た風景がそのどちらかに分類されていくような感覚があるといえます。このことから映像と言語（抽象的概念）が同時に記憶に影響していることが分かります。

H先生に学ぶ「時短」術

授業でしっかり理解することができるからこそ、家での勉強は効率を重視して行っていたH先生。「すでに分かっていることを勉強しても効率が悪い」という考えに基づき、即座に問題集に取りかかり、自分が分からない問題がどれなのかを確認していました。そして、分からないところを教科書で調べ直して勉強していたそうです。一冊の問題集がすべて解けるようになると、同じ問題集をやり直すよりも二冊目で知らない問題に出会う方が効率がよいと考え、実際にそうしていました。こうした時間効率を上げる努力を続けた結果、学年が上がって内容が難しくなっても授業の進度に食らいついていくことができ、気持ちに余裕をもって勉強に臨むことができたということでした。

こちらもオールラウンダーなF先生

苦手な分野がほとんどなく、正六角形に近いグラフとなりました。しいて言うなら辞書タイプです。F先生と言えば国語のプロフェッショナルというイメージがあるのですが、話を伺うと、中学生

時代は吹奏楽部“命”の生活であり、その後は外国への留学経験もあり、塾で理科講師をしていた時代もあり、皆さんも知っているように読書やゲームにも深い理解がある「何でも屋さん」でした。

中学生時代を思い出すと、勉強はそれほどしていませんでしたが、「調べ癖」がついていたことは今になって思うと大きな財産でした。薬剤師で博識な両親の影響もあって、部屋にずらりと並べられた大百科事典に手を伸ばし、その日に新しく知った言葉などを調べていたと言います。好奇心を大切に過ごして過ごし、様々な経験をしてきたことが今の自分につながっているそうです。

F先生に学ぶ「のめり込み」術

そんなF先生が勉強にのめり込んだのは高校生時代。きっかけは、初めて(?)授業が面白い先生に出会ったから。そのとき「え、勉強って面白いじゃん!」と感じたF先生は、好きなものにはとことん熱中できる元々の性格が幸いし、ぐんぐん成績を伸ばしました。「好きこそもの上手なれ」という言葉がありますが、苦手な教科に対して興味をもつことで心理的な抵抗がなくなり、不思議と内容が頭に入ってくるようになるのです。自分から心を閉ざしてしまえば、新しい価値観と出会うことがなくなります。「嫌だな」と思いながら続けていても成果が出にくいので、まずは「これ好きだ!」と思えるように、自分から行動を起こしていくことが大切なのではないでしょうか。

3Dタイプ特化のO先生

他の項目と比べて3Dタイプが非常に高い結果だったO先生。日常の生活での何気ない出来事をよく覚えていて、生徒一人ひとりの変化にもすぐに気づくことができる温かい先生です。3Dタイプは目から入ってくる映像情報に興味をもつことが多いのですが、O先生に理科が好きな理由を聞いたところ、やはり「色が変わる、燃焼して性質が変わる、スピードが変わるなど、目に見えて変化が分かるところが面白い」という答えでした。中学校時代を振り返ってみると、ノートにまとめたり文章を読んだりすることは苦手で、むしろ「ノートに目を落としている時間があるくらいなら、目の前の光景を目に焼き付けておこう」という気持ちで臨んでいたそうです。

O先生に学ぶ「セルフ・コーチング」術

まとめるのが苦手と言っても、大学生になれば論文を書かなくてはいけない時期がやってきます(※論文の執筆は多くの大人にとって、思い出したくないほど過酷な戦いです。特に理系。研究室で年越しすることもあるとか...)。また、大人になれば向き・不向きを問わず様々な責任が否応なくのしかかってきます。そんなとき、O先生は心の中で自分に声をかけます。「大丈夫、十分に頑張っているよ」「昔よりも成長しているよ」。そんなふうに自分を褒めながら、目標に向けて自分のモチベーションを高めているそうです。

考えてみると、これは世の中の多くの中学生に身につけてほしい技能だと言えます。世界の他の国と比べて、日本の子どもは自己肯定感が低いことで有名です。いつも友だちと自分を比べて、「自分にはよいところがない」と悲観してしまいます。ところが、先ほどのF先生の話とも関係するのですが、勉強やスポーツなどにおいてマインド・セットはとても重要な要素なのです。「俺はできる!」と思っただけで実際に多くの成果があがるようになります。通常、成績の低い人ほど「俺はできる!」と感じる機会は少ないので、よい連鎖を生み出しにくい状況に陥っている可能性があります。これからは、何か小さなことでも達成することができたら、O先生のように自分を褒めて次へのモチベーションにつなげられるとよいですね。